

NPO 法人 都市災害に備える技術者の会

ニューズレター issue 44



都市災害に備える技術者の会事務局：〒651-1432 兵庫県西宮市すみれ台3-1（太田ジオリサーチ内）
TEL:078-907-3120 FAX: 078-907-3123 e-mail: office@toshisaigai.net http://www.toshisaigai.net

京都の地震火災対策を考える

監事 山田信祐

西山、黄檗、花折などの活断層に囲まれ、阪神・淡路大震災以降、西日本が地震の活動期にあると言われる現在、京都が抱える地震による災害リスクは、益々高まっていると考えなければならない。では、その備えはどうだろうか。京都のまちは守れるのだろうか？ここでは阪神・淡路大震災以降、喫緊の課題とされている「重要文化財建造物（以下ここでは「文化財」とする）を地震に続いて発生する可能性のある同時多発性の市街地大火から守る」に焦点をあてて、当 NPO ではほとんど議論されないが、今後の都市災害の一つとして注目される「地震火災」について消防水利の確保の観点から考えたい。

京都は戦災を免れ、古いまちなみを残しながら、生かしながら成長、発展し、京都らしさの源の一つとなっている。一方、災害を考えた場合、それが大きなリスクを抱える素因になっていることも忘れてはならない。例えば市内の住宅のうち、木造戸建住宅の割合が 43.5%で大阪市 19.5%、神戸市 30.2%に比べて高く（平成 25 年住宅・土地統計調査 総務省）、燃えやすく、火災に弱いまちと言わざるを得ない。その対策として消防体制が強化され、また昔から市民の防火、防災に対する意識が高いことも反映して、火災の発生件数は全国的にも低いレベルを保ってきた。では「通常の火災」（地震、戦争、放火によらない火災）ではなく、本題の地震直後に発生する「地震火災」の場合はどうで

あろうか。

京都市消防局によると阪神・淡路大震災の水不足を教訓として「京都市防災水利構想」（地震等の大規模災害時に必要となる消火用水などを地域特性に応じて確保することを目指した理念）を平成 13 年に策定し、事業を進めている。例えば震災時に消火栓が使用不能と想定した耐震型防火水槽の設置が今年度末でほぼ完了し、消防水利不足地域は解消されると聞く。震災時の消防水利整備対策も着実に進んでいる感がある。

一方、京都、奈良をはじめ関西に多数存する文化財の地震火災対策の必要性について、平成 16 年に関係省庁による「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」で検討され、平成 20 年 2 月に開催された中央防災会議では地震後の同時多発性の市街地大火による文化財の被災可能性が報告されている。京都でも各界の著名人が参画し「明日の京都 文化財プラットフォーム」が平成 22 年に発足、「先人から受け継いだ文化遺産を毀損することなく後世に伝える」ことを主旨として事業展開されている。この中で学識者から「大規模な地震火災が発生すれば、鴨川沿線をのぞき京都の中心市街地は丸焼けになり、文化財も消失する可能性がある。たとえば（せせらぎが復活した）まちなかの「堀川」に大量の水を流し自然消防水利とすることが必要」と消防水利不足が指摘されている。行政と学識、それぞれの現状認識、考え方に大きな差があるのはなぜだろうか。行政担当者は、財政などの制約条件下で迅速に「結果」を求められることが多い。そのため「実

現可能性」が常に頭から離れない〈経験者語る〉。一方、学識においては（失礼があれば、お許し願いたい。）「想定外」という言葉が禁句となった今、最悪のシナリオを前提とした課題設定とその解決策を究極の研

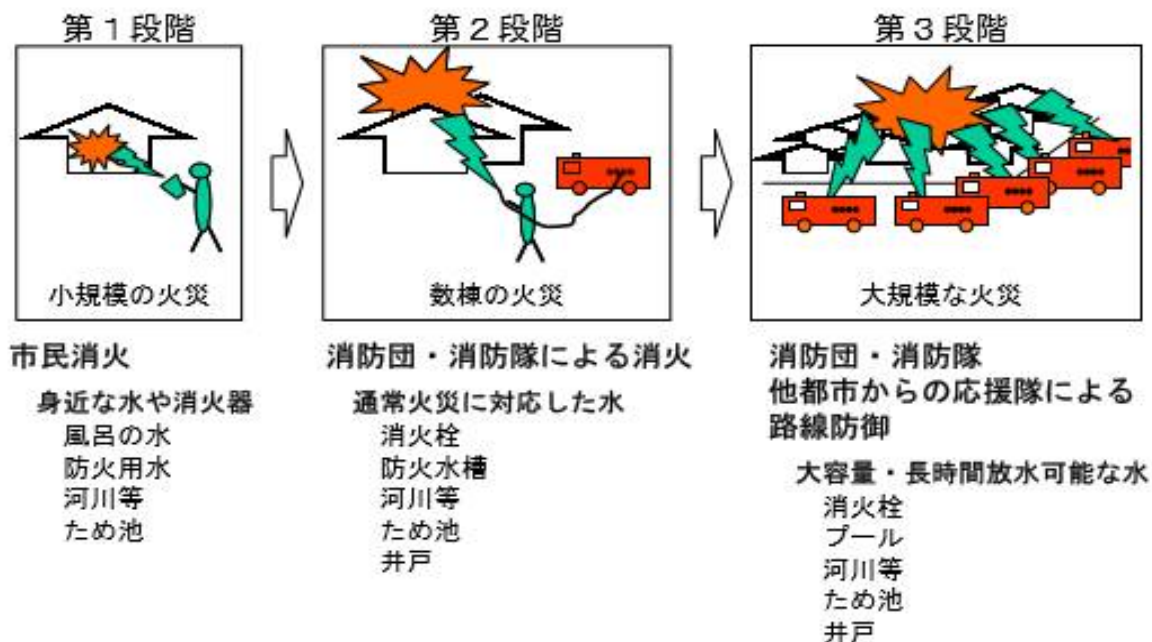
究課題とする姿勢がうかがわれる。今回の見解の相違も、下図（防災水利構想）に示すように消防局は第2段階を、学識は最悪を想定して長期目標である第3段階あるいはそれ以上を想定していると考えれば理解しやすい。前提条件や仮定などを正確に把握することを忘れてはならない。

では、何を今後どうすべきか、どこを目指すべ

はないかと感じた。ちなみに最近5年の冬場の乾燥期（12～3月）の日最大風速は8m/secを超えている。第2段階が完了した今、次のステップに向けた検討とその具体策を探るといふ備えは現下の財政上、実現が困難としても怠ってはならない。

最後に火災防災に明るくない私がなぜ火災に関心があるのかをお話したい。

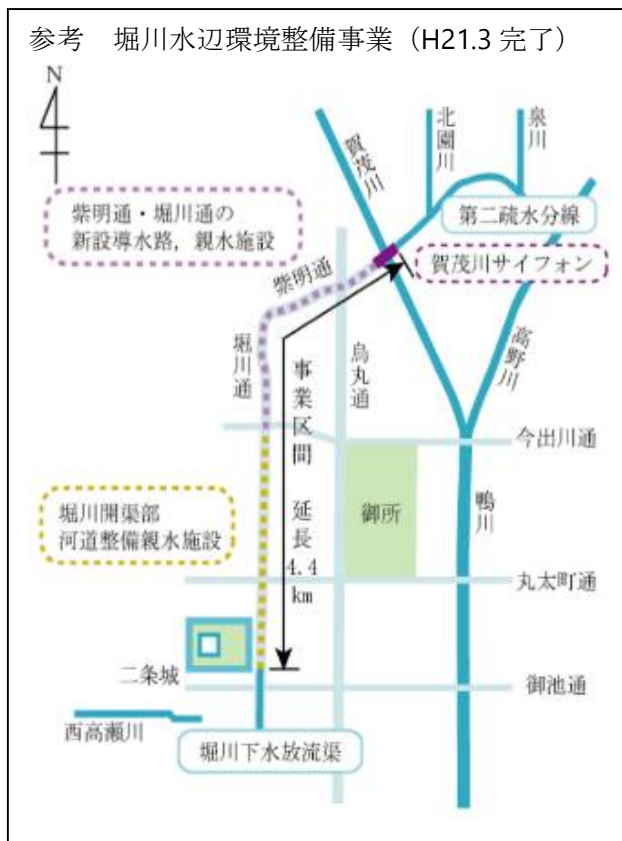
京（みやこ）の自然環境を表す「山紫水明」という言葉があるが、戦後の都市化、特に昭和30年代の治水対策、下水整備に伴い、水の流れ、水と緑とまち並みが一体となった京都の景観が失われて久しい。



きなのだろうか？自助、共助、公助の役割を踏まえ、自ら、地域で、あるいは行政とともに、できる事を考えなければならない。

こんなことを考えている最中、昨年暮れに糸魚川市で大規模な火災が発生した。歴史を支えてきた旅館や酒蔵などが灰燼に帰した惨状を見て、火災からまちを守り、歴史を伝えることの意味を改めて考えさせられた。木造密集市街地、細街路、空き家住宅の増加と防災上の課題が山積し、他都市に比べて燃えやすい京都のまちが阪神・淡路大震災のように大規模延焼を招き、火の海になる「最悪のシナリオ」の想定し、様々な観点から対策を考えておくべきで

一方、阪神・淡路大震災以降、災害時の河川水や河川空間の重要性が再認識され、川の持つ防災機能を重視した川づくりの重要性が京都でも「京の川再生検討委員会」を中心に議論され、平成11年の提言に「堀川」がモデル河川に位置付けられた。「防災水利構想」に基づく「命の水」として市民生活と防災を支える水を市内中心部に位置し、降雨時の下水の余水吐機能しか有しない枯れた川の「せせらぎ」復活に求めた。参考として下図に「堀川水辺環境整備事業」の概要を示す。京都市に在職中、私も構想から実施計画作成の段階で携わった。しかし、当時の財政状況から忸怩たる思いで多くの計画を



した宿題を提出する機会を得た。「実現可能性の呪縛」が解けた今、長い目で考えながら「京都が京都であり続ける」ことを夢みて再チャレンジしたいと考えている。

「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。」

吉田松陰

断念した主な事業

- ・堀川から二条城の堀への導水
- ・二条城の堀の水の浄化
- ・二条城の堀と西高瀬川の接続 など

発災後のアンケートについての協力依頼

当 NPO では、自然災害の発生後に被災地や後方支援地に赴いて、能動的にボランティア活動を行うことについて、昨年4月より議論を進めてまいりました。具体的にどのような活動ができるかは未だ議論・研究途上ですが、まずは、会員の方々の専門領域と発災後ボランティアに関するご意見を集約した上で、データベース化し、今後の活動の準備を始めたいと考えております。

会員の皆様方には、上記の趣旨をご理解いただき、本アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

<http://toshisaigai.net/> に解答用紙をアップロードしています。

事務局 だより

- ◆ニューズレターのバックナンバーは、ホームページ (http://toshisaigai.net/newsletter/newsletter_index.html) にアップロードしています。
- ◆ワーキンググループ活動の例会の案内は、ホームページにも掲載しますので、ご興味のある方は参加してください。
- ◆あらためてご案内いたしますが、振替用紙が届きましたら2016年度会費の納入をよろしく願いいたします。(正会員 5000円です) すでに、会費を振り込まれた方は、ありがとうございました。
郵便局 00990-1-162816 加入者名 都市災害に備える技術者の会
三井住友銀行 藤原台支店 普通預金 7566003 特定非営利活動法人 都市災害に備える技術者の会
(2年間連続で未納の場合、自動的に退会扱いとなりますのでご注意ください。)
- ◆住所変更・メールアドレス変更等はできるだけ早く事務局にお知らせください。
書式等は、ホームページ <http://toshisaigai.net/join/join.htm> にあります。
- ◆メーリングリストが届かない方は、事務局までお知らせください。またメーリングリスト不要の方は、毎月初めに届くメーリングリスト備忘録に従って登録を外してください。
- ◆研修会講師の心当たり、あるいは研修内容の希望がありましたら、事務局 (office@toshisaigai.net) までお知らせください。
- ◆ニューズレターの原稿を随時募集いたします。お気軽に事務局までお送りください。